ななかまど
東京旭川会
会報

第4号　昭和57(1982)年1月25日
発行　東京旭川会
東京都新宿区西新宿7-4-3 升本ビル
東京美装興業株式会社内
TEL.(03)363－2721
編集　東京旭川会会報編集委員会

北方圏文化をめざす郷土に期待

「第五回総会報告」会場のあちこちで久振りの友人同士の談笑風景が見られ、旭川市からも市長をはじめ大勢が馳けつけ、あさひがわコミュニティーは華やかな演出で幕開く……

第五回東京旭川会の総会、懇親会は晩秋の十一月十三日、赤坂のホテルニュージャパンで盛大に幕をあけた。

定刻より四時間も早く午後二時から世話役の幹部二十余氏が集合し、一切の用意をととのえるうち、本年は開会前午後四時から帝都高速度交通営団の運転指令所で地下鉄運転の舞台裏を見学した三十余名が会場に到着、続いて次々と出席者の数を増し予想を上回る二百六十名という参加者が会場を埋めた。

とくに今回は女性参加者が多く、華やかな中にも和やかな会のムードを盛り上げた。

写真は郷土の発展を願って乾杯(下)と上野囃子保存会による獅子舞い(上)

参加二百六十人と大盛況の中
福引抽せん会に人気集まる―

山海の珍味も

本年は第五回を記念して開会に先立ち午後五時五十分から、上野囃子保存会五人衆による江戸囃子と寿獅子が吉田敏明副会長の解説で披露された。太鼓、鉦、笛などによる囃子と獅子舞で典雅ななかにもにぎにぎしく演ぜられた。

総会は八木祐四郎常任幹事の司会で開会、平岡会長が議長となって挨拶の後、議事に入り五十五年度事業報告、収支決算報告、五十六年度事業計画と予算（別掲参照）が南栄二常任幹事から読み上げられ、竹原茂雄監事の監査報告が行なわれ、満場一致で承認、ついで役員改選に入り、ここで松原利治常任幹事が議長を交代し、平岡会長、御手洗、吉田両副会長ら役員を満場一致で選任して総会はとどこおりなく終了した。

続いて懇親会に移り、平岡会長より挨拶の後、本年も旭川より上京したミス旭川・山口尚恵さん、準ミス旭川・渡辺万里子さんを司会者から「ご両人とも六条通り生まれで、六条通りは美人の産地らしい」とユーモアたっぷりの紹介に満場爆笑し、二人からそれぞれ会長、副会長に束が贈呈された。

ついで坂東徹旭川市長から「日本の中心都市東京にかくも多数の郷土人の活躍を見て、われわれもこれを目標として頑張るつもりでいる。旭川は人口三十五万六千人で、毎年五千人から六千人増加しており、行政面積では全国で八番目の都市に成長している。在京の皆さんには団結とつながりを持ちながら郷土旭川の発展のために今後ともお心遣いいただきたい」と、発展目ざましいわが郷土旭川についての挨拶があり、つづいて大城栄子常任幹事から坂東市長への花束贈呈が行なわれ、割れるような拍手を浴びた。

ついで太田剛北海道倶楽部理事長が「おめでとう」と乾盃の音頭をとり、世界コンクール金賞受賞の銘酒、「男山」で高々とグラスをあげ、山海の珍味を前に和やかなパーティに移った。

酒間郷土選出の安井吉典、五十嵐広三、川田正則各代議士が壇上に紹介され、代表して安井代議士から「郷土のことについては体当りでやってゆきたい」と力強い挨拶があり、また、小柳勝人市議会議長から「来秋は新空港が完工し、ジェット機が就航するのをはじめ、道立美術館、硬式野球場の工事進行中で都市計画のテンポは早い」と市の近況報告が続いた。

小山昌克商工会議所副会頭からは見事なノドで即興の相撲甚句くずしが披露され、満場の拍手喝采をうけた。

一、お集い願った御一同
　　語る言葉も懐かしく
一、山より高く海よりも
　　深きぎずなを胸に秘め
一、大雪山を仰ぎ見て
　　はるかに志のぶ故郷や↖

いんたびゅう

東京旭川会の第五回総会・懇親会に参加したミス旭川・山口尚恵さん(二十一歳)と準ミス旭川・渡辺万里子さん(同)に、「アサヒガワ」と「トウキョウ」について意識度インタビューを――。

山口さん(上)と渡辺さん(下)

千歳往復無料旅券の景品も飛び出した抽せん会(左端平岡会長、中央坂東市長)

●第五回総会出席者

青野茂、青木平三郎、赤松綾子、縣二郎、荒川繁、有末精三、四十物昭三、安藤正人、足立のり子、有馬弥史、伊藤一男、井川正、井上克己、五十嵐広三、石井恵美子、石川泰男、板垣ツヤ、板井一瓏、板倉美代子、市田勝一、石上已博、石川陵一、池島久子、上草義輝、上田進康、氏家一衛、梅原音二、植野光彦、遠藤勝敬、小潟ナターシャ、小沢慶子、尾崎哲、尾上一郎、尾崎靖亮、大久保藤次郎、大野悦郎、大西浅市、太田剛、大矢健、太田龍太郎、大石武夫、大城栄子、大村巌、太田幸雄、大室惣一郎、岡和田精、岡田昂、奥山三男、奥原正枝、奥野寛一、押味信子、折登建憲、折登昭三、落合隆朋、大沢輝子、荻野京子、加藤辰雄、片貝美雄、笠木真知、金谷音江、金津良三、金安勝雄、川田正則、川田修也、河毛矩子、河村尚之、河村浩、河端敏博、神代秋夫、金子節子、神部泰、喜多登、喜多美佐子、菊地文男、菊地拓、菊地正、工藤義男、工藤昇、窪田稔、黒岩義之、黒崎弘、熊木啓一、工藤八重子、久米秀子、日下学、桑本平八、小池栄寿、小坂佐久馬、小島猛夫、小西栄一、後藤正士、後

—旭川に生まれてよかった？
山「ハイッ。都市と田舎がミックスしています」
渡「とても好き。住みやすいし、遊ぶにしてもいいし……」
—〝わが故郷〟の自慢は？
山「食べ物がおいしい」
渡「ツツジなど花が美しい」
—じゃ、トウキョウのイメージは？
山「東京に来たのはこれで四回目。晴れていてもスカッとしない町。ごみごみした町」
渡「立派なところとキタないところが目立ちます」
—あなたの人生のモットーは？
山「幸せな結婚をすること」
渡「わたしも、そう」
—結婚して旭川以外の土地で住みたいところは？
山「旭川以外にいきません」
渡「わたしも」
—愛読する雑誌は？
山「若い女性」
渡「JJ」
—好きな男性は？
山「古谷一行」
渡「西田敏行」
—いま、坂東市長がしきりにいっている〝北方圏文化〟って知っている？
山「さあー」
渡「わかりません」
—師団通りって知っている？
山「知りません」
渡「聞いたことあります」

(1)

旭川で発行されている「旭川春秋」という雑誌に、山本憲彦さん（梅屋総本舗・常務）という方が「わが街旭川」という題で、旭川の好きなもの、好きなところと嫌いなもの、嫌いなところを書いていた。このひとは三十代の半ばに旭川へ移り住んで三年、永住するつもりであるという。

三年というのは、ちょうどいい期間である。昔から私は三という字が好きだ。こどもの時、いろはかるたで、三べんまわって煙草にしようというのをまずおぼえた。三年たてば三つになるとか、三々九度とか、三つ子の魂百までとか、仏の顔も三度とか、拾いあげたらいくらでもある。三というのは、たいへんきりのよい数なのであろう。

ところで、山本さんは好きの方に二十六項目、嫌いの方に十項目あげている。断然好きなもの、好きなところが多い。

その筆頭が「月の出た、しんしんとした雪の夜ふけ」さすがに三年たって三つになった山本さんはいいところを見ている。全く文句なし。

つぎが「ユーカラ工芸館右手の裸婦像」木内さんのユーカラ工芸館は旭川の新名所であるが、そこの裸婦像に目をつけたところ、なかなかの鑑賞力である。

三番目が「生ちらしのエビ、ホッキ、ホタテ」これも異論はないところ。ひとつひとつあげるのはやめるとして、「さっぱりとした旭川人の人の良さ」は、十番目に嫌いなところになっている。「何かと大まか、気くばりの少ない気質」と表裏の関係にあるといえよう。

「東海大裏より川ごしにみた近文の山の四季」というのは、想像だけだが、わるくはないだろう。九月旭川で落ちあった太田剛、波多野勝君から旭中の同窓生と嵐山の展望台にのぼってみた。素晴らしい眺望であった。

「真冬、ストーブの横で裸でいられること」や「大都会にはない、子供達のリンゴのホッペ」は、ちょうどこの季節のものだ。そういえば、リンゴのホッペなど、私は何年も、ことばそのものさえ忘れていたくらいである。

嫌いなもののトップは「冠婚葬祭」とあるが、私には全然見当がつかない。お心あたりのかたに教えていただきたい。

「雪どけ後のほこりと風」これは本州から移ってきたひとが、口を揃えていうことだ。「ウドン、ソバの醤油色した汁」が第三位になっているが、徳島で生まれ大阪で育った山本さんは、さぞかしいやだろう。しかし、私はあまり抵抗を感じない。

「三六街、PTAの母親と先生の飲み歩き」となると、私などの想像を超える。しかし「下水の不備」となると、今後坂東市長さんに大いにがんばっていただくしかない。

（毎日新聞社会長）

旭川好き嫌い

会長　平岡敏男

一、大志を抱き東京に　雄々しくかかげし金字塔

本年は新しく福引景品の抽せん会が行なわれ、松原常任幹事の進行でミス旭川、準ミス旭川の手で抽せんされ、雪印乳製品詰合せ、鮭、一億人の昭和史十五冊セットと進み、東亜国内航空の千歳往復五割引券、最後に千歳往復無料旅券と総数五十四点の豪華な景品にいやが上にも会場が盛り上がった。

ここで予定の時間も過ぎ、縣二郎顧問の万歳、御手洗正夫副会長の閉会の辞があり、お土産に坂東市長から旭川米、ラーメン、馬鈴薯とずっしりと重いほど沢山ちょうだいして来年の再会を期し散会した。

なお会場には旭川市事務所のご配慮により旭川市街図、旭川圏都市計画図、そして旭川の素描'81でなつかしい建築物などの写真が掲げられた。例年好評の郷土物産即売会も旭川市橋詰商店特価提供の山海の珍味があふれ、新巻鮭一キロ千百円、昆布三五〇グラム千二百円、数の子二〇〇グラム千五百円、すじ子一キロ六千円など市価の三割前後安く、このほか十勝観光協会からラベンダー石けん、香水、その他ホワイトチョコレート、ラーメンなど数多くの品が並べられ、総売上げは六十五万五千円にのぼった。

また、会場の一隅では旭川市発行地方都市の自立と戦略（旭川経済の八十年ビジョン）の出版物の即売も行なわれた。

藤利雄、近トク、合田トシ子、佐々木宏、佐々木憲一、佐藤正彦、榊原潔、笹谷享市、笹谷栄一朗、沢田清蔵、塩谷キン、直原綾子、重野孝三、島田佳代子、勝田正之、白井フサ、須藤正一、須藤智恵子、杉松秀樹、鈴木与之助、鈴木秀子、世良保、関口達夫、関口和子、関口緑、関谷赳夫、関山義人、田村昌士、田中義憲、田辺勝、高橋武夫、高嶋文夫、高島孝子、竹内醇司、竹内幸子、竹内薫、竹川哲雄、竹原茂雄、武田陽子、武田範芳、辰田守、立岩鈴枝、玉田郁生、田中国夫、武田妙子、高橋国二、高木明、高橋正夫、土田昇、土屋初代、土井磨智子、豊島経行、中野虎雄、中田雪子、中山精二、中村猛、中村節子、中井律子、中井延也、仲山栄一、長坂広光、永田幸男、並木治子、中陳国光、丹羽敏明、仁科禎、西川栄、西田育子、西本武市、日光摂子、野口保元、野村トシ子、野田元子、野瀬ミツエ、芳賀照雄、馬場量定、萩野敏夫、長谷川健一、長谷川平八郎、長谷川厚子、橋本直久、蓮本稔、蓮本池鶴子、花輪音三、坂東宗光、原公朗、花輪元治、林正子、林伸夫、平岡敏男、久富勝次、広瀬芳一、深井弥一、福居秀一、福原博子、藤井繁、二川武、二川ちえ子、福田一、細谷弘治、堀江秀明、堀川和延、本間敏弘、堀内貞子、前木誠、牧田逸子、松原利治、松原富子、松浦常雄、牧野彰、松山信子、三浦正平、三浦英次、三浦勤一、三浦清史、三井勲、造酒多津男、御手洗正夫、南栄二、三宅一郎、村上登茂子、村井与吉、室谷文治、村上茂利、森喬伸、八木祐四郎、八倉巻等、矢木茂昭、安井吉典、山田智子、山田玲子、矢野正康、吉武恭一郎、吉田敏明、吉田雅俊、吉田千里、吉田克良、吉田律子、吉田輝子

（以上二百六十名・敬称略）

「東部老人福祉センター」開所式で挨拶する坂東市長（56年6月8日）

中小企業大学の誘致を

通産省の中小企業庁が進める中小企業大学校北海道ブロック校の建設候補地に旭川市が昭和五十六年十月下旬に開かれた北海道ブロック校建設準備委員会で正式に決定した。

中小企業大学校は、中小企業対策の一環として、中小企業庁が五十七年から設置を進めている施設で、中小企業経営者や中小企業後継者、技術者らを対象に、高度な研修を行ない、いわば中小企業のための人づくりをするのが目的。

現在、本校の東京校（東京都府中市）と関西校（兵庫県福崎市）の二校があり、中小企業庁では、その後全国を十ブロックに分け、毎年一～二校を設置する方針である。

同校誘致のために、旭川市の立ち上がりは、道内で最も早く、熱意を示したが、その後、道内各市町が名乗りを上げ、小樽、帯広市、広島町など五市三町が、猛烈な誘致合戦を展開、このため当初八月末には決定との見通しが延び延びになって、ようやく十月末に決定となった。

旭川での建設予定地は、市内西神楽四線五号の旭川医大に隣接する四万三千平方メートルの用地で、その建設規模はおおよそ関西校のものと同じくらいとみられ、事業費約二十二億円、年間研修生五百人くらいが予想されている。

愛育センターオープン

これまで市内三ヵ所に分散していた緑光学園（精神薄弱児通園施設）、くるみ学園（精神薄弱者通園更生施設）、わかくさ整肢園（肢体不自由児母子通園訓練施設）の三施設を統合した施設とする「愛育センター」の第一期工事が昭和五十六年十月末に完了、十一月二日にオープンした。総工費約五億八千万円、鉄筋コンクリート平家建て二千七百八十二平方メートルの規模。

東部福祉センター開所

旭川市では二番目の都市型老人福祉会館「東部老人福祉センター」が

愛する旭川と会のご発展を願って

衆議院議員　川田正則

よき先輩がいることは、誠に有難いことです。この東京旭川会が立派に存在していることも、太田、平岡先輩のご指導があればこそと思い、心から感謝いたしております。

私も東京での生活が続いておりますが、例会などで先輩や多くの仲間にお会いし、心くばったご助言を賜わり、本当に心の支えにもなりますし、また貴重な情報に触れられるなど、私にとっては素晴らしい会であると思います。

いま、故郷旭川は大きく飛躍しようとしています。待望の新空港が来年完成し、いよいよジェット機が東京と旭川を結ぼうとしていますが、どちらかと言えば、旭川に対するイメージは〝遠くて、寒いまち〟とされているだけに、この遠いまちの感触が払拭されるだろうと期待している一人でもあります。坂東市長さんは、公約として空港が一日も早くジェット化されるようにとしておりましたが、各関係省庁に猛運動されたことと、東京旭川会の平岡会長さんはじめ多くの皆様のご支援があったからでもありましょう。

ご承知のとおり、人口は三十五万五千を数える旭川ですが、まだまだ都市的基盤は十分とは言えません。道路整備、下水道の普及など市民生活の根幹となる基盤が出来上がっていないわけで、坂東市長さんは、立ち遅れを一生懸命にばん回しようとしており、着々と整備されているのです。

また、人口の増加に伴って、小、中学校、高校などの教育施設を整備しなければならないことも、旭川の課題でもあります。現在、小学校六十一校、中学校三十校で、今年新たに小、中学校が増える状況になっています。

一方、旭川のまちは地理的な条件からみても、どちらかと言えば、何でも間に合うまちとして発展してきたとの感がいたしますが、若い人々が住み働く場としては何か欠けているように思われます。買物や医療の面では、施設や内容が充実しており、遜色ないのですが、やはり若い人達が定住して、まちの活力を燃やす原動力になってもらわなければならないと思いますので、新空港を中心に新たな産業化が強く望まれているのではないでしょうか。殊に大雪山連峰をはじめ、自然条件は恵まれております。雄大な自然を背景に伸び伸びした創造性豊かな産業経済の発展を願ってやみません。

坂東市長さんは、そうした面での基盤づくりにも懸命ですし、東京旭川会の皆様も機会ある毎に、知恵を出していただき、心から故郷旭川にご支援をお寄せ願いたいと思います。私は、旭川のまちが北・北海道の中核的な都市となり、さらに日本列島や国際社会でも重要な役割を担うまちとして発展されるように、私自身も頑張る考えですが、会員の皆様ともども重ねてご協力願いたいと考えます。故郷を愛する一人として、会員の皆様のご健勝と会のご発展を心から祈念し、ご挨拶といたします。

つれづれなるままの歌

大塚重親

若い者に負ける――そんなことは考えたくない。しかし現実を無視することはできない。

弁護士の仕事の関係で旭川から札幌まで国鉄列車に乗ることが多い。沿線の風物が、私を退屈させない。十年一日のごとくが、戦後三十六年にもなり、函館本線も旭川駅を出てすぐトンネルにはいり、カムイコタンが車窓から見えなくなったほかには、沿線の変化をあまり意識しないが、相当変っている筈である。

以前は旭川から札幌に出て、用件をはたしてその日のうちに帰ることはむずかしかったが、今では午前と午後に札幌と旭川の法廷に出ることも、できるようになった。

そのような年代による変化の中に身を置いているのだから、自分の心もそれに応じて変化させるのが順序であろう。しかし実際は逆になるべく自分を変化に応じさせないように努めているのであるまいか。

近頃小学校に行っている孫に遊び相手をときどきさせられるが、遊技器で点数をきそうと小学生に負ける。他の人にきいても同様である。

遊びながら唄まじりにやっている子供の方が勘がよく、機敏に指を連動させる。こちらは練習すれば負けないと思って遊技器を取りあげてやってみるが、なかなか子供に及ばないことを知らされる結果になる。そして若い者のエネルギーをばかに出来ないと感じる。

次代は若い者に譲るのだと思っても、今の若い者の家庭内暴力、学校内暴力、校外の各種の非行を思うと

郷土ニュース

ニュース提供：
旭川市東京事務所

新市営球場58年秋に

半世紀にわたって野球ファンに親しまれてきた旭川市営球場が、昭和五十六年春から全面改築のためとり壊され、七月からは五十八年秋の完成を目指して、新しい球場づくりが進められている。

市の計画によると、新球場はグラウンドと観客席部分を合わせて、総面積二万一千五百平方メートル、中堅までが百二十メートルと、旧球場よりやや広くなる。収容人員は内野席が一万人、外野席（芝生）が一万五千人で、内野席スタンドがこれまでの三千人収容よりぐんと広くなる。内野席側には、高さ十四・五メートルのコンクリートを打ち上げ、二十四段の観客席を設ける。[illegible]三塁側の最前列には身障者用の[illegible]席、トイレを設けるなどの配慮がなされている。

総工費は十四億二千万円で、駐車場など外側部分も含めると、十六億六千万円程度が見込まれる。

完成、昭和五十六年六月八日、落成開所式が関係者多数出席のもと開かれた。

このセンターは、市がお年寄りの心豊かな生活の確立と、生きがいづくりを目的に、昭和五十五年開設された北部老人福祉センターに次ぐ二番目の福祉会館として市内の東旭川町本町に、総工費二億九百万円をかけ建設したものである。この施設、設備内容は、生活、健康相談室をはじめ、浴室や機能回復訓練室、軽作業室など、お年寄りたちの使いやすさが重点に設計され、とくに機能回復訓練室は市内でも有数の充実した訓練用具がそろえられている。

ジェット化今年秋に

拡張工事が進んでいる旭川空港はいよいよ今年初秋に完成し、市民待望のジェット化される。

従来、滑走路一、二〇〇メートル、幅員三〇メートルでスタートした同空港は、増大する需要と航空機の大型化、高速化に対応し、また地域開発など経済的な展望に基づく交通体系の確立を図るため拡張整備が緊急の課題となっていた。完成すると、滑走路二、〇〇〇メートルになり、DC9ジェットが導入可能となるが、さらに誘導装置等の完成をまつ五十八年には、エアバスA―300（二八一人乗り）が就航する予定である。

なお、現在、同工事のため閉鎖されている空港は、ジェット化に先立って、今年二月一日からYS11型機が運航を再開する。

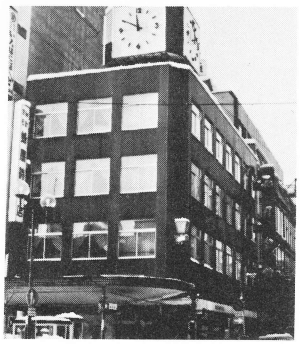
バーサー大会近づく

〝たぎる情熱、二本のライン――いま白銀の北の大地に〟をキャッチフレーズに、第二回バーサー大会が三月二十一日（春分の日）、旭川競馬場を主会場に開かれる。

昨年に続いての今年の大会は、名実ともに、国際大会にふさわしく、FIS（国際スキー連盟）の公認を受けてのA級クロスカントリー、さらに気楽に参加しようがモットーの〝歩くスキー〟の二つが行なわれる。

平和通り今昔絵巻

富岡政子


買物公園の一角で時を告げる

平和通りで生まれ育ち、そして平和通りで生活をして参りました私にとって、平和通りは人生そのものでございますし、消し難い思い出も数多くございます。

幼ない頃のことは別といたしまして、私の青春時代は、いわゆる軍国主義華やかな時代で、私にとってそれは正に〝灰色の青春〟でございましたが、その中で、今でも鮮烈な思い出は師団長着任式の光景でございました。

師団通りに、着剣した兵隊さんが整列する中を、乗馬した師団長が通るのを垣間見てその威風堂々たる姿に、異様な感に打たれたものでした。

また、お正月や祝日には、礼服姿の将校さんも多数見受けられて、師団通りはその名にふさわしく、文字どおり軍都の顔であったと思います。

終戦と同時に、師団通りが平和通りと改称されたことは今更こと新しく申しあげるまでもございません。

「平和国家」、「文化国家」という言葉が新聞やラジオに毎日のように出て参りましたが、その言葉とは裏腹に、軍隊が営業の上で大きなウエイトを占めていた平和通りのお店にとって、大きなお得意を忽然として失ったことと、物資の不足とは大きな痛手でございました。私の店など

複雑な気持になる。

話題を変えようと思って「つれづれなるままに、ひぐらしすずりにむかいて」という徒然草を思い出した。今、何もつれづれでないのにこれを思い出したわけは、定年制のことを気にしていたからであろう。定年制は日本人の平均寿命がのびたことの一面として問題になっている。

私は自営業であるから、従来の延長線の仕事をしているが、定年制のあるところに勤めていたとしたら、定年になって退職していることになる。そうなると、ひまが出来て「つれづれなるままに」どうしたらよいかということになるのであるまいか。

交通機関も、機械も技術も発達して、今の日本人は昔の人の何十倍も仕事をしていることになり、仕事を寿命に換算すると昔の人の何倍も長生きしたことになると思うが、さて定年[illegible]ほどうするか、ということは未解決である。

悠々自適とは昔から言われてもいるが、悠々自適できるような修養を私はつんでいないので、人にすすめられない思いがする。

何か言おうとしても口に出かかって差し控えることがある。何でも言いたいことを言ってしまって、差し支えのない年には、まだなっていないことを感ずる。それは自分がまだ若いためと解釈しておきたい。

永年俳句を作っているので二句書き添える。

地虫出づわれそれを見る地球人
雲流れ秋は静かにゆきつつあり

（筆者＝弁護士、学校法人・大塚学園理事長、ホトトギス同人、俳誌「石狩」発行）

では、子供がショウウインドでかくれんぼをして遊ぶ有様で、いわば平和通りの最も沈滞した時期ではなかったかと存じます。

軍隊のなくなった旭川、その衰退が予想された旭川経済が、これとは逆に、その商圏を急速に伸ばしたのは、旭川商人のバイタリティだといわれておりますが、これと軌を一にして平和通りも漸く活気を取り戻すようになりました。昭和二十五、六年頃だったと記憶しております。

それでもまだ、大きな建築物といえば、一条の丸井さん位のもので、通り全体としては、良く言えばローカル色豊か、悪く言えば大きな田舎町の域を脱しませんでした。

その後、市街地再開発ということで、ご多分に洩れずビルラッシュとなり、偉容？を誇るわが店舗も影がうすれるほどの変貌ぶりでございます。

とりわけ、平和通りが大きく変わった転機は買物公園として、通り全体が、今までに例のない街づくりをしたことだと存じます。

その買物公園も、できてからすでに十年近くになろうとしており、今はショッピングばかりでなく、ヤングの通りとなりました。

駅前には大型店が五店もひしめき合い、東京のファッションがダイレクトに流れてくるようになり、北国の街としてのカラーはほとんど影をひそめてしまいました。

何はともあれ、この通りを往き来するヤングたちが、ふるさとを思うとき、あるいは年老いたときに、心の中に平和通りを思い浮べる――そんな平和通りに成長してほしい、という気持で平和通りを見つめている昨今でございます。

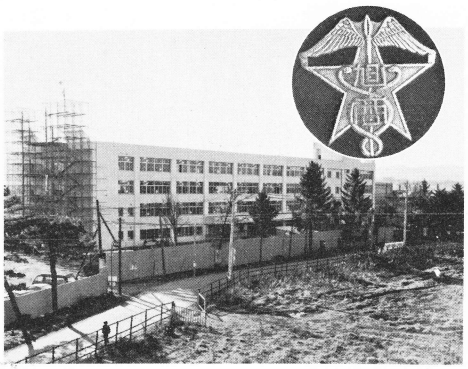
（旭川市立高女昭和十三年卒・旧姓米沢）

同窓会だより

旭商60年の足跡

濱崎静夫
（旭川商業高等学校長）

旭商は、大正十一年の開校後、六十年を迎え、漸く校舎の改築もなり残すところ外溝工事のみという状況で、新年を迎えました。（写真）



これを記念して、本年十月、母校の卒業生を中心として協賛会が祝典を挙行する準備を整えるに至ったことは、在校生をはじめとして関係者一同にとって慶賀に堪えません。

校舎改築期成会の岡嶋保二郎初代会長が、母校のため文字通り粉骨砕身の努力をされ、今日の成果となりました。今は亡き岡嶋大先輩に改めて感謝とお礼を申し上げます。

顧みれば、昭和三十二年十一月、創立三十五周年記念事業として、旭商会館（現図書館・講堂）が竣工なりました。当時のPTA会長・山田修蔵氏、同窓会会長・岡嶋保二郎氏らの奔走をはじめ、生徒実習販売会の益金百万円をもとに完成されたものです。この会館は同窓生にとって、心の故郷であり、郷愁を禁じ得ないものでしたが、耐用年数も過ぎ、老朽化が目立ち、存続することが困難となり、多くの先輩の要望に応えられず、とりこわしの運命に至ったことは本当に残念でした。

昭和四十四年、旧旭商会館に代わって、体育活動、文化活動の振興のために新旭商会館が旭商奨学会の所有地に落成されました。この着工のために、奨学会の所有する伊納の山の材と実習販売会の益金をもって当てられたと聞きますが、諸般の事情から、会館は道に寄付をし、運営は学校が行なうことになりました。

また、この年には商業科に加え、時代の要請に応えるため、新たに情報処理科の設置をみ、コンピュータの導入が行なわれました。このために産業教育振興費の補助を受けて、三階建ての商業科の特別棟が竣工しました。

そして、昭和四十五年、校舎改築期成会の準備委員会が発足、漸く四階建ての新設備をもつ校舎の落成となったわけです。

六十周年事業は、校舎内外の施設・設備の充実をめざしています。五十七年度より実施される新学習指導要領による基礎・基本に徹した、特色ある学校づくり、環境づくりをと期待しています。このため、一般経済界、同窓会、在学生父兄有志のご協力により、資金を調達することになりました。しかし、本道における産業界の現況は、必ずしも今[illegible]好転しているとはいえず、むしろ景気の停滞のなかにあります。とくに、地元旭川での木材産業の不振と倒産の影響が強く、多くの方々の浄財によって、施設・設備の充実を行なうことは、学校として心苦しい限りです。

そうした状況のなかで、六十周年記念事業は、人々の努力の結晶による事業として、冗費をはぶき、あえて実施することになりました。そして、良き先輩たちが築き上げてきた旭商をさらにより良くし、産業界にそのお礼を含めて、有能で貢献する人材の育成を図りたいものです。

●旭川東高校同窓会

東京支部だより

勝田正之
（副支部長）

旭川東高校同窓会は本部を旭川におき、会員数は約二万名に近く、毎年一回、八月に定例の総会を開催しています。

同窓会の東京支部は、東京近郊に在住の同窓（上川中、旭川中、旭川高、旭川東高の出身者）の交誼を温めるため、二十年ほど前に、故井上菊雄氏（旭中十回卒）ほか有志の方々の提唱により創設され、ついで昭和三十九年、東洋電機製造株式会社に事務局を移設、同社社長太田剛氏が支部長に就任しました。

その後、昭和四十七年二月十二日日本電子計算株式会社に事務局を移管し、現取締役会長勝田正之氏が副支部長に就任、現在に至っています。

毎年、支部会員を中心に、総会を兼ねた懇親会を開催し、会場を東京海洋会館（新宿区・元三福会館）に定め、開催日も三月十日が定例となっています。

明治三十六年に創立の上川中は、その後校名を旭川中（大正四年）、旭川高（昭和二十三年）、旭川東高（同二十五年）と幾度か改称されましたが、八十年に近い古い伝統を持つ前記出身の同窓生を、すべて一つの同窓会の会員としている点は、この同窓会のユニークな特色といえましょう。

東京支部の総会は、年に一回開催のこともあって、この日を楽しみにしている会員も多く、総会当日は例年二百名前後の会員が一堂に会し、先輩、後輩が互いに母校を語り合い、郷土の酒を酌み交わしながら、過ぎし佳き時代を偲び、恩師、旧友との再会を喜び合うなど、心暖まる交歓風景が会場一杯に繰り拡げられます。

殊に、最近は女性の参加が増加の傾向にあり、一段と和やかな色彩と雰囲気を添えています。

総会には来賓として旧師のほか本部の同窓会長が出席、郷土旭川や母校の近況などの披露もあり、また例年八月、旭川で開催の本部の総会には、当支部から支部長または副支部長が参加するなど、本支部間の交流も活発に行なわれています。

支部会員の中には、国会議員、会社役員、大学教授、弁護士、医師、音楽家、文学者、芸術家など活動の分野はきわめて多彩で、これら各界の第一線で活躍中の者が年に一度、年代の差はあっても、一つの学び舎で学んだ同窓の絆で固く結ばれ、ともに語り、ともに歌い、互いに健康を祝して杯を重ねる風景は、まことにこの同窓会ならではの美しい感激の場といえましょう。

これらの行事のお世話をする支部の事務局は、現在日本電子計算株式会社（取締役会長勝田正之・旭中二十三[illegible]の中にあり、種々の世話に当っています。

現在の支部会員は約九百名。本部と支部の現役員は左記のとおり。

▽本部

「旭川東高校同窓会」

会長　森山元一

旭川市六条通十二丁目

電話〇一六六（二三）一八〇七

▽東京支部

「旭川東高校同窓会東京支部」

東京都中央区日本橋兜町六―七

日本電子計算株式会社内

電話〇三（六六八）六一七一

▽支部長＝太田剛（苫小牧東部開発㈱社長）▽副支部長＝平岡敏男（毎日新聞社会長）、勝田正之（日本電子計算㈱会長）▽評議員会長＝縣二郎（王子製紙社友）▽同副会長＝前田義徳（元NHK会長）、小坂佐久馬（教育出版㈱会長）▽評議員＝六十九名▽幹事＝太田貴久（トータルオフィス常務取締役）ほか十二名。

●旭川高等女学校同窓会

「桜花会」の歩み

桜井多美子
（桜花会会長）

「桜花会」とは北海道庁立旭川高等女学校同窓会のことでございます。

明治四十年、当時の旭川は人口三万人の小さな町でした。中学校は北海道庁立上川中学校（現旭川東高）のみでした。女子教育のためにと地元民の強い要望により、道内で札幌、函館についで四番目の庁立上川女学校が発足しました。

初代校長の明石孫太郎先生が、日本婦人の清く美しい理想を願って桜の花の芯に勾玉をあしらった桜花の校章を考案されたそうでございます。爾来、大正四年に北海道庁立旭川高

等女学校、昭和二十三年北海道庁立旭川女子高等学校と学制改革により名称は変遷しましたが、昭和二十五年男女共学の現・北海道旭川西高等学校になりますまで四十四年の間、桜花の校章と、そのこころは連綿と生き続けて参りました。

昭和五十四年五月十八日、母校を懐かしむあまり結成に至りました北海道庁立旭川高等女学校同窓会は、卒業生五、九四二名の全国組織をもちまして、当時の校章にちなみ名付けましたもう一つの同窓会の愛称〝桜花会〟を、この日の臨時総会で採択、同窓会規約と共に歩みを進め始めたわけでございます。もとより、卒業生にとり母校の名称は厳然とした、かけがえのないものでございますが、声高く懐かしむ上にも、現在の旭川西高同窓会の分離と誤解されますことを懸念しての当時の最善策でした。同窓生の交誼を深め、旭川西高のルーツとしての誇りと責任をもち、母校の発展に思いを至すことを目的としております。

●東京支部の集い

昨年「東京旭川会」入会のお誘いを受けて、いよいよ本格的に今年度からお仲間入りをさせていただきました。東京にて皆様それぞれご立派なお仕事をなさっておられる諸先輩の方々と同郷のよしみによりご交誼を賜わり、こんなに嬉しいことはございません。

さて、われらが母校、旭川庁立高女の古き良き時代に想いを馳せてペンをとらせていただきました。実は、昨年旭川を訪れまして、母校の「桜花会」総会に臨むに当たり、前日車を駆って五条四丁目の元の校舎跡を訪れたのです。卒業後、四十年をへた校舎跡は想像さえ許されぬほどの変貌ぶりでありました。ただただ驚くのみで、時の推移の変化に茫然と立ちつくしてしまったのでした。暫し瞼を閉じ、タイムトンネルをくぐり抜けて蜃気楼のように彼方に浮かぶ映像は、木造の校舎、それをめぐる生垣、学生通用門をくぐるとすぐ左側にあったテニスコート、コートに面して建っている寄宿舎、裏へ廻るとバレーボールのコート等のある戸外運動場etc……。戸外運動場を囲むようにして音楽堂、図書室等々……。

そして、三年生と四年生の教室に囲まれるようにして中庭があり、中庭には懐しい藤棚があったように記憶しています。当時は市立高女と庁立高女がありました。現代の方々には想像もつかないでしょうが、「男女七歳にして席を同じゅうせず」という時でしたから、あこがれの旭中生らと会っても顔を見ることももちろん、言葉を交わすことさえ出来なかったものです。偶然、路上ですれ違うだけでも胸はドキドキして、家へ帰ってからそっと想い出すのが関の山でした。

でも、果たして、それは不幸なことだったのでしょうか。いいえ、人生幾つになっても見果てぬ夢を追い続け、当時を回想するだけで楽しいものです。ただ眼と眼が合った一瞬だけを一生の想い出にとってあるのです。

時代はそんなロマンがまだ漂っていた頃でした。やがて上級学校進学のための上京組と嫁入修業の家事見習組とに分れ、それぞれの道を進む頃、戦争もいよいよ酣となり、女子学生といえども軍事教練などやらされるようになりました。あこがれの異性たちは、ほとんど戦場に赴き、見果てぬ夢は甘酸っぱく胸の中に広がっては消えてゆくばかりでした。

あの雪深い北国の女学生時代を憶い起こして、そこはかとない感慨にひたるのも、桜花会ならではのことだと思います。

（牧田逸子記）

▽連絡先＝〒一四二　東京都品川区中延五―一五―一〇　桜花会東京支部、支部長・牧田逸子

●旭川市立高等女学校

今は亡き母校へ

宮北治平（元同校教師）

「昭和二十五年四月、新学制の実施で、旭川市立高女は七条高校と改称されたところへ私は赴任しました。ところが、赴任してみると、校舎は新制中学校に転用され、生徒、職員は道立東、西、北の三校に分れ、移籍されて、残っていたのは有名無実の七条高校という校名と書記二人だけでした。それから一年間で残務整理をして、二十六年三月末日で、七条高校は完全に消滅しました。従って、私は教え子も職員もいない、校舎もない、名称だけあった七条高校の校長でしたが、誠に奇妙な存在でした。」

と市立高女の最後の模様を語るのは安達三夫先生です。先生は、昭和二十七年四月に栃木県へもどられてから、さらに二十年間教育界につくされた功労で、昭和五十年十一月三日、勲四等瑞宝章を授与されています。

今は亡き旭川市立高等女学校は、大正四年五月十五日に旭川区立女子職業学校として中央尋常高等小学校校舎の一隅に開校されたのが前身です。大正五年十一月十六日には旭川区七条十六丁目に校舎を新築し、移転。同十年四月一日には旭川区立北都高等女学校と改称。昭和七年、緑蔭会館（同窓会館）建築落成。同十年六月三日に旭川市立高等女学校、同二十二年四月一日には旭川市立女子高等学校、二十五年四月旭川市立七条高等学校と改称の歴史を歩んで、昭和二十六年三月三十一日に閉校となりました。

昭和五十六年十一月九日付「北海道新聞」夕刊旭川版に次のような記事が載りました。旭川市立高女で昔、用いた鐘が、学制改革で校舎を受け継いだ市立北都中学校（荒屋敷俊明校長、生徒数六百七十六人）で、三十年ぶりにセットされ、清らかな音色を朝夕、校内に響かせているとのこと。鐘はこれまで校長宅に保管されていたが、亡き母校をしのぶきっかけになればと思い、取りつけることにした、とこれは荒屋敷校長先生のお話しです。高女の生命はこの鐘にたくされて、脈々と生き続けることでしょう。

さて、緑蔭会館も、戦後、旭川市立北都中学に校舎が割愛されたとき、撤去されて姿を消しました。けれども、昭和四十八年、当時の緑蔭会会長の大塚高枝さん（昭和十二年卒業）を中心にした努力が実って、昔の母校に近い七条十四丁目左仲通りの市有地に二階建ての会館が新築されました。そして、昭和四十九年四月、緑蔭会は、会館内に北海道医学技術専門学校を正式に開校しました。この学校は高校卒業後の三ヵ年課程で男女共学、臨床検査技師の養成を目的としています。初代理事長・大塚高枝さんに続き、現在は市の中心部で眼科医院を経営されている稲積文子さん（昭和二十年卒業）が二代目に就任されています。

いま、北医専は、今後の飛躍的発展を見越して、広大な学校敷地を医大の近くに確保、将来にそなえています。付近には、現在道立旭川工業高校の新校舎が建築中、本年には道立南高校もこの地に新校舎を建設する予定とのこと、さらに高等看護学院建設の予定もあるとか、ここ二、三年の間に、ユニークな文教地区が出現しそうです。

●東京支部の活動

緑蔭会（北都高女、旭川市立高女）東京支部は、会員が現在三百五十三名（リスト記載者のみ）、毎年五月十日前後に、緑蔭会同窓会を開いています。昭和五十五、五十六年は、池袋の東方会館で、本年も同場所で五月九日（日）に開催の予定です。

年々盛会で、昨年は旭川より宮北治平先生をおまねきし、東京では、鈴木（旧溝口）秀子先生と卒業生七十余名が出席しました。とくに、第一回卒業生（大正七年）の篠原はつさん、第二回の庄司つね子さんらも参加され、お年を感じさせない若々しさに後輩一同驚いたものです。若さを保つには、東京支部の緑蔭会同窓会に出席するに限るようです。

また昨年十二月十三日には、佐藤（現在遠藤）信子先生を山形よりお招きして、新宿の地球飯店で、緑蔭会「佐藤信子先生を囲む会」を有志二十名が集い、開催。昔なつかしい学生時代に戻って、先生とともに語らい、再会を約束したものでした。

▽連絡先＝東京都大田区大森北六―十三―二大森家政専門学校内　鈴木秀子宛まで。電話〇三―七六一―三六九二（学校）、七六三―一四三七（自宅）

（関口和子記）

事務局からのお願い

▽昭和五十六年度版の会員名簿完成しました（一部五百円）

▽昭和五十七年度の年会費未納の方なるべく早くお納め下さい（郵便振替払込書ご利用下さい）

●昭和五十五年度収支決算

昭和五十六年八月三十一日現在

〈収入の部〉

繰入金	五九〇、四四一円
五十五年度会費	四三一、四〇〇円
五十五年度総会会費	八一〇、〇〇〇円
名簿売上代金	二六、五〇〇円
寄付金	四一三、〇〇〇円
雑収入	四二、九三七円
合計	二、三一四、二七八円

〈支出の部〉

総会経費	一、〇四五、九六〇円
印刷費	五七三、四六〇円
通信費	一二四、六六〇円
会議費	八三、六五〇円
交際費	四八、〇〇〇円
手数料	一、四五〇円
事務費	一、一七〇円
雑費	六、七五〇円
支出計	一、九〇五、一〇〇円
繰越金	四〇九、一七八円
合計	二、三一四、二七八円

昭和五十六年八月三十一日

東京旭川会会長　平岡　敏男

常任幹事（会計担当）　八木祐四郎

以上の会計事項について監査の結果、適正に処理されているものと認めます。

昭和五十六年九月七日

監事　竹原　茂雄

黒崎　弘

赤坂小皿味処

茶茶亭

赤坂といえば、高級料亭―社用族といったイメージが強いが、この店は、サラリーマンが会社の帰途フラリと立寄りポケットマネーで気軽に楽しめる極めて庶民的ムードを持つ民芸風な異色の存在である。そのためか外人の姿も時々見られ、国際親善にも一役買っている。

北海道の味専門ではないが、季節に応じ、アスパラ、ジャガイモ、ルイベ、氷下魚その他懐かしい故郷の家庭的手造り料理を味わわせてくれる。

ママさんは東高八期、美人で気さくな亀井啓子さん、以前にこの欄で紹介した旭川ラーメン番外地の姉妹店でもある。

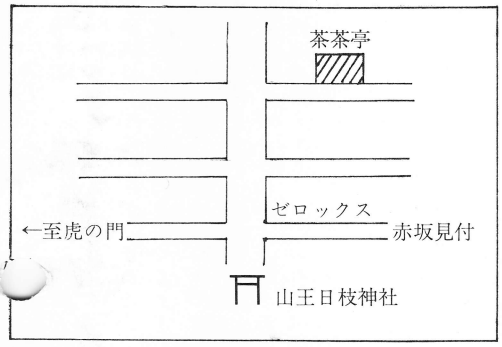
場所は、赤坂の山王日枝神社の鳥居を背に、みすじ通りを右に曲ってすぐ、大きな提燈が目印し。東京旭川会総会の後に流れて行く人も多く、普段でも行けば誰かしら旭川の人に会えるという楽しみもある。

住所　港区赤坂三―十一―十四

赤坂ベルゴ豊栄ビル1F

電話　五八七―一六〇六

（M・S記）



ななかまどの実を仰ぎつつ同期会
修道尼のくらしを見るや秋の鳶
雪虫の貨車と貨車との間に殖ゆ
秋の雨厨介馬車のゆるやかに
登別熊牧場
秋天へ熊手を拡げ餌を受く
熊の声秋天を衝きこだませり
秋風の子熊あらそふビスケット

横浜市保土ヶ谷区狩場町三〇三―一三一　鈴木　喜美恵

事務局日誌

▽昭和五十六年一月三日、村上勇顧問永眠▽一月二十二日、旭川市東京事務所松浦常雄所長、永田幸男次長着任挨拶に来局▽四月十四日、常任幹事会開催（於事務局）▽五月十三日、北海道ふるさと会連絡協議会役員会（御手洗副会長）、総会（御手洗副会長、桑本事務局長）出席▽六月十二日、北海道ふるさと会連絡協議会事務局長会議（堀川常任幹事）出席▽六月二十四日、幹事会開催（於事務局）▽七月十日、常任幹事会開催（於事務局）▽九月七日、幹事会開催（於事務局）▽十月十二日、常任幹事会開催（於事務局）▽十月二十六日、幹事会開催（於事務局）▽十一月十三日、第五回総会並懇親会開催（ホテル・ニュージャパン）▽十二月十七日、幹事会開催（於私学会館）

編集後記

☆旭川の弁護士であり、俳人である大塚重親先生から書き下しの原稿をいただく。俳号は「千々二」と申しあげる。先生は旭中から中央大学法学部を出られ、戦時中まで、丸ビルの福井盛太法律事務所で修業された。福井先生はのちに検事総長となられた法曹人である。「サケの子は生まれた川へ還る」とは大塚先生の名句。いま、生まれた川へ戻られた先生は、幼稚園を経営され、地道な文化活動を展開されている。心からご発展をお祈りしたい。

☆ミス旭川と準ミス旭川にインタビューする。ともに高校を出て、旭川市内に勤めるOLである。総評は旭川の平均的OL像（ちと厳しいかな）。いまの若いコは「ミス」も「準ミス」も、どちらでもそう意識しないようだが、これはコンテストの順位である。東京でも横浜でも土地のPRを兼ねて、地元選出の「ミス」をフルに活用している。その意味で費用と時間をかけて、山口ミス嬢と渡辺準ミス嬢をはるばる送って下さった観光協会に深謝したい。が、今後、東京方式でミスを複数にしたらどうだろう。若いコにランクをつけて外へ出すのは曲がない。コンテストの際、内規で「第一ミス」「第二ミス」として、外へ出してもらう時は、一律に「ミス」とする。土台、美は審査員諸公の個人的判断であり、美そのものの要素も時代とともにゆれ動く。それよりも旭川市政の目玉である「北方圏文化」を「知らない」では困ります。上川盆地でとどまる限り、北方圏文化を知らなくてもいいだろうが、ミスは旭川が外へ派遣する〝美の大使〟なのだから。関係の皆さん、よく言っておいて下さい。

☆旭川市から総会の席でナナカマドを七宝にしたタイタックをちょうだいする。[illegible]に「ASAHIKAWA」と横文字がある。アサヒカワかアサヒガワか――。たしか国鉄旭川駅は「ASAHIGAWA」と濁ったはず。地名は歴史と文化を背景とする。あえて統一する必要がないともいえるが、本来、「かわ」か「がわ」なのか。

☆まいどながら、平岡会長の肝いりで毎日新聞写真部のベテラン、中西浩氏に総会撮影にきていただいた。もう顔なじみで、会場のあちこちをまわってパチパチ。この機関紙を美しく飾れるのも、そのおかげ、改めて編集委員一同、感謝。

☆第五回総会は、幹事の予想をオーバーして二百六十一人も集まった。急に在京の旭川人が里心ついたわけではない。女の名門校、庁立旭川高女の同窓生が、グループ参加したためである。次回は、北都（市立）高女の方も、もっと動員していただきたい。声あり、「そのうち女の会長が生まれる！」。けっこう、北の女は伝統的に逞しいオバンである。男も負けずに参加を。

☆また今回も総会のため、大心堂雷おこし、サッポロビール、合同酒精、東亜国内航空、毎日新聞、男山、朝日生命、五建工業、鴻池組、昭和実業（順不同）などから数々のご寄贈を受けました。

☆旭川会幹事会が十二月十七日、市ヶ谷の私学会館にて開催された。平岡会長、御手洗、吉田両副会長はじめ、二十五名出席して総会の収支報告と反省を話し合った。本年の総会は桜花会を主に予想を上回る出席者があり、また福引が会場のふん囲気を盛り上げたが明年総会にも各方面の協賛を得て、ますます充実したものにしたいというのが役員一同の一致した意見であった。

☆当「ななかまど」について、会員皆様のご意見、ご批判を遠慮なくお寄せ下さい。ご要望は出来るだけ取り上げて親しまれる、より良い会報にしてゆきたいと思います。

（編集委員＝南栄二、田村昌士、大城栄子、関口和子、落合隆朋、佐藤正彦、伊藤一男）